

第3章 地域における散策観光の実態

1. 本章の目的

第1章と第2章では、歩行とは、散策的経路選択と目的経路選択が複合化されて実行される歩行のあり方であることを明らかにし、図式に整理して理解をした。さらに、散策的歩行とは、その歩行のなかでも散策的経路選択の傾向性が高い歩行のあり方であることを示した。そして、誘導案内標識は、経路選択のなかでも目的経路選択に対する機能であるため、その頻度が少ない散策歩行にとっては、十分に機能することが出来ないことを明らかにした。また、散策的経路選択においては、地図的な情報提示が有効に機能していたことから、空間的情報の適切な伝え方が重要であることが推察出来た。

しかし、第1から2章で明らかにした内容は、あくまで公園という限定された範囲において得られた結果であり、本研究が対象とする地域観光地と比較すると、散策歩行に関する要素限定されたものとなっていた。そこで、本章以降では、より多様な要素が関係することが想定される地域の観光地へ考察の対象を移行し、より具体的な調査分析をすすめる。

しかし、現状では地域観光において散策歩行は、多くの試みはあるものの、成功を収めている事例はきわめて少ない。そこで、本研究の観光に対する考え方と共通の考え方を基盤に持ち、散策型観光を促進することを目的としている南房総の地域において、交通社会実験が行われる期間を生かして、実験的に歩行者用案内標識を設置し、散策観光および散策歩

行の調査および分析を行い、地域観光における散策歩行の実態を把握する。

よって、本章では、地域観光における散策に関して、具体的な場所で実践的な調査分析を行うことで、以下の3つの観点から実態を明らかにする事を目的とする。

- ① 地域における散策観光の可能性
- ② 地域観光における散策の歩行特性
- ③ 散策観光における散策歩行拡大のための情報提示の必要性

2. 調査対象地の観光と歩行者用案内標識の

現状

本研究の対象地である、南房総地域を概観する。この地域は、観光対象として大きな目的となるような観光資源は無いため、単体では観光資源として不足であるが、それらを巡り歩くことによって、観光資源となる可能性が高いと考えられる。

2.1. 調査対象地の観光の現状

2.1.1 調査対象地域の特徴

調査対象地である富浦町と千倉町は、千葉県房総半島の南端に位置する町である。(図3-1) この地域は、平成17年度の行政区域で言うと安房支庁の所轄範囲となり、鴨川市、館山市、鋸南町、白浜町、

千倉町、富浦町、富山町、丸山町、和田町、三芳村によって構成され、平成18年3月20日に、鴨川市、館山市をのぞく8町村が合併し、南房総市となった地域である。これらの地域は、行政的にも合併が進められてきたように、一つのまとまりがある地域として捉えられ、観光客にしてみても、南房総は一つの観光圏域と認められてきている。たとえば、観光客が千倉町と隣接する白浜町の区域を意識することはほとんど無い。これは、南房総地域が、房総半島の南端に位置し、三方向を海に囲まれ、温暖な気候的な特徴と地形的な特徴から、そのようなまとまりを持った印象を与えていると考えられる。

このような地形的風土的な特徴から、個性的な農林水産業が営まれ、観光の資源としても注目されている。枇杷栽培やみかん栽培、生産量全国上位に位置するアイリス・キンセンカ・カーネーションをはじめとする多様な花卉園芸、また、露地花栽培や、捕鯨、磯漁、等が展開されている。観光の中心は夏の海水浴と春の花摘みであるが、鴨川シーワールドや、南房パラダイスのような施設も集客性があり、その他にも南総里見八犬伝のゆかりの地や、日蓮生誕の地など、地域文化歴史遺産なども点在し、首都圏を視野に入れた観光地としての活性化の可能性は十分あると考えられている。

しかしながら、一方で、高齢化過疎化が進み、地

域の魅力を掘り起こし、「住んでよし、訪れてよし」と言われるような地域づくりが求められている地域でもある。また、この地域には、地域の魅力を体験するために作られた数多くの遊歩道があるが、実際はほとんど利用されていない。そこで、これらの特徴的な魅力を持ちながら、観光に有効に生かされていない遊歩道があり、散策型観光を促進することを目的とした交通社会実験が行われる、富浦町と千倉町を対象を絞りさらに調査を進める。

2.1.2 富浦町の概要

(1) 基本情報

富浦町は、南房総市の中でも比較的首都圏に近く、鉄道ではJR東京駅からJR富浦駅まで2時間30分程度でアクセスでき、車でも富津館山自動車専用道路が開通したため、首都圏近郊からアクセスしやすい位置にある。

枇杷は、特に有名で、特産品として強く売り出している。南房総の中でも内房と呼ばれ、外海とは異なる静かな浜辺が連なり、海水浴が行える砂浜が多い。以前はこうした海水浴客のための民宿業が盛んであったが、日帰り観光が一般となった現在では、民宿は激減している状況である。

地形的には、南房総国定公園の一部である大房岬が、富浦漁港をはじめとする富浦の浜辺を囲むように位置し、内海の静かな浜を作り出している。この大房岬は、キャンプ場や、少年自然の家などがあり、自然豊かな観光の拠点ともなっている。

(2) 富浦町における観光拠点

富浦町は、観光に対する取り組みを積極的に行っており、今回の交通社会実験は、富浦町が窓口となっておられた。その他にも、様々な特徴ある取り組みが活発になされているが、今回の交通社会実験に強く関わり、観光の拠点として機能しているのは次の2つの施設である。

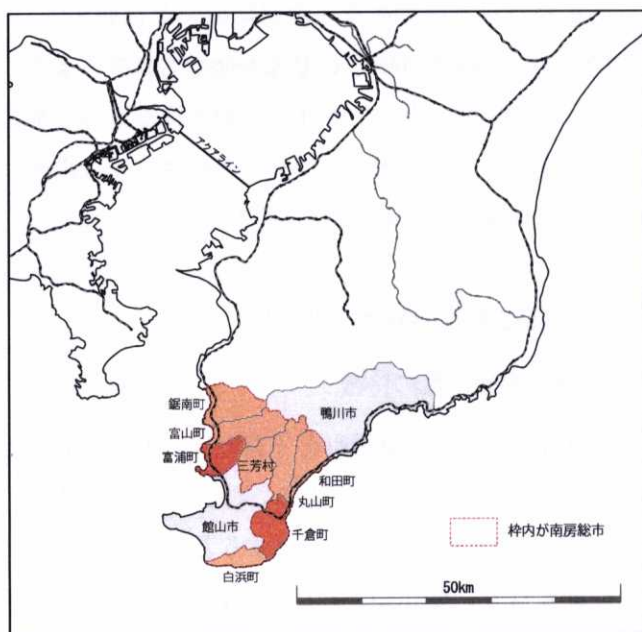


図3-1：南房総エリアの位置図



図 3-2：JR 富浦駅 外観・内観



図 3-4：富浦町の様々な魅力

① JR 富浦駅

富浦町へのアクセスでは、2つの交通の拠点がある。一つが、車利用者にとっての道の駅・枇杷倶楽部であり、もう一つが鉄道利用者のための富浦駅である。

この駅舎は、いわゆる地方の駅舎とは異なり、建築外観では富浦の枇杷の葉の色をイメージさせるような緑色で包まれ、内部には待合いのスペースの豊かな空間が用意されている。隣接して、観光案内所や清潔なトイレもあり、鉄道利用客にとって観光の拠点としての意味合いは強い。

また、駅からハイキングは、JR 東日本が主催することもあり、この富浦駅が出発点として機能している。(図 3-2)

② 道の駅・枇杷倶楽部

枇杷倶楽部は、車利用者に対する観光の拠点である。以前は、国道 127 号が南房総地域に対する車利用者の主なアクセスルートであったため、国



図 3-3：道の駅・枇杷倶楽部

道 127 号から入りやすいこの施設は、富浦町の観光拠点だけでなく、南房総地域全域の観光拠点として位置づけられていた。しかし、現在では、富津館山自動車専用道路のインターが離れた位置に設置されてしまったため、車利用者の立ち寄りがしやすいように様々な工夫を進めているところである。

③ とみうら遊楽散歩道

「とみうら遊楽散歩道」と名付けられた散策コースは、既存の一般道路を利用したもので、基本的に 1 種類の回遊型のコースである。このコースは、毎年

春先に行われる「駅からハイキング」のコースにもなっている。道に沿って、鉄道駅 (JR 富浦駅)、道の駅 (枇杷倶楽部) を含み、住宅街や海岸沿いを通る比較的に平坦なコースである。

このコースには強い魅力で集客できるような特徴的な施設はないが、歩きながら周囲に目をやると、数多くのさまざまな魅力を発見できる。こうした魅力は、散策をしながら体験しないと感じ取られないような内容のことが多い。(図 3-4)

2.1.3 千倉町の概要

(1) 基本情報

千倉町は、富浦町と異なり、南房総でも外海に面し、外房と呼ばれる地域である。そのため、海岸沿いには美しい砂浜でサーフィンを行う観光客もいれば、漁船のための港も数多くあり、海岸沿いは変化に富み魅力に事欠かない。この漁港では、近年まで捕鯨が行われており、ツチクジラは千倉町に非常に親しみを持たれ、名産ともなっている。

さらに、南房総という温暖な気候によって形作られる照葉樹が群生する森も沿岸近くまであるため、海と共に山も合わせて体験できる魅力がある地域である。

(2) 千倉町における観光拠点

① JR 千倉駅

富浦町と同様に、鉄道駅が観光の一つの拠点となっ



図 3-5：JR 千倉駅駅舎と周辺

ている。特に、JR 富浦駅と異なり、JR 千倉駅は特急が停車するため、鉄道を利用する観光客にとっては重要な位置づけとなっている。

しかしながら、駅自体の魅力の乏しさや、千倉町の観光要素が集中しているエリアから離れているため、現状では有効に活用されていない。

駅舎自体は、今後新築されることが検討されており、新たな観光の拠点として期待は大きい。(図 3-5)

② 道の駅・潮風王国

鉄道駅とは異なり、主に自家用車利用客が利用する拠点である。千倉町の観光の代表的な要素である海や花畑、そして小高い山が周囲に多くあるため、非常によく利用されている。また、施設自体の計画もよく工夫されており、多くの観光客が立ち寄る人気の拠点として成功を収めている。(図 3-6)



図 3-6：道の駅・潮風王国

③ 里山遊歩道

千倉町の数ある遊歩道の中でも、特に様々な魅力を持った遊歩道である。しかし、現状では、その存在がほとんど周知されていないため、地元の人ですらほとんど利用することがない。

コースの多くが田畑のあぜ道を含んで複雑に広がっているために、全体像が分かりづらいという事が考えられる。また、体験できる魅力が細やかで、季節や時期によって変化する事も多いため、注意しないで散策をすると、魅力に気がつくことは少ない。さらに、このような様々な状況に対し、この遊歩道に関する情報提示がほとんどなされていないという事が根本的な課題だと云える。

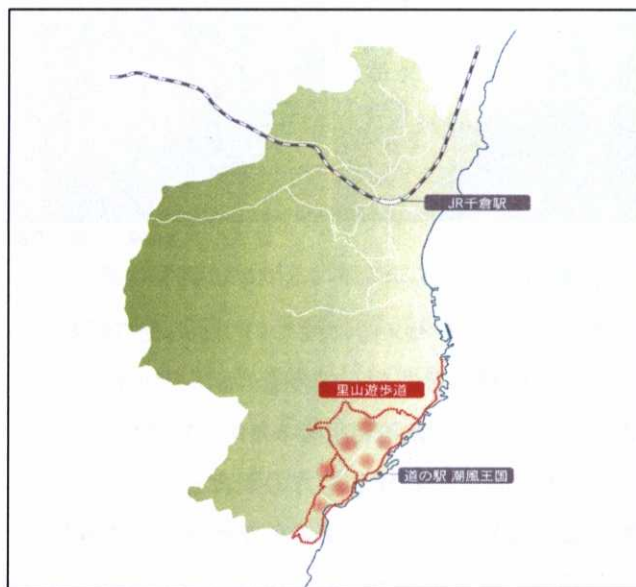


図 3-7：千倉町と里山遊歩道の位置図



図 3-8：里山遊歩道の様々な魅力

2.2. 調査対象地の歩行者用案内標識の現状

2.2.1 富浦町の案内標識の現状

観光のための歩行者用案内標識はほとんど設置されていない。JR 富浦駅前に手書きで作られた総合案内地図が設置されているのみである。(図 3-9) この案内地図は、手書きによる暖かい雰囲気はあるものの、管理がなされていないため、部分的にはげ落ちてしまい見づらいものとなっている。JR 富浦駅は富浦町で行われる「駅からハイキング」の拠点となるため、ハイキング開催時には、駅を起点とした専用の誘導案内標識が設置されるが、これはあくまでイベントであるため、終了後には撤去されるものである。(図 3-9)



図 3-9：富浦町で見られる観光歩行者用の案内標識

2.2.2 千倉町の案内標識の現状

千倉町でも富浦町と同様に、歩行者用案内標識はほとんど整備されていない。公的私的に関係なく、様々な観光に関連する施設が、誘導案内標識を設置してはいるものの、どれも統一されていないため、煩雑で理解しづらく、景観的な問題も多い。また、遊歩道に設置されている案内標識は、朽ち果ててしまっているものが多く、利用するのが困難な状況となっている。(図 3-10)



図 3-10：千倉町で見られる観光歩行者用の案内標識

2.2.3 調査対象地域の案内標識の現状のまとめ

散策歩行による観光が非常に適した地域であり、地域活性化という観点からも強く求められているが、環境整備は多くの課題があると云える。

そもそもの、散策観光に対する取り組みが不十分ではあるが、一方で、実際に観光を行うために必要不可欠な案内標識が質的にも量的にも不足していることが大きな課題であることは明らかである。

3. 散策促進のための歩行者用案内標識設置の実験的实施

ここでは、2004 年に行われた南房総地域における社会実験の基本的考え方と、観光を実現させるために行われた観光促進の試みの概要を示し、その機会を生かして、本研究の調査のために実験的に設置した、歩行者用案内標識の基本的な考え方を示す。

3.1. 2004 年に南房総地域で行われた交通社会実験の概要

交通社会実験の詳細内容は、「広域連携による自立型経済圏形成推進事業（千葉県鴨川市他）報告書」に記述されている。¹⁾ この事業報告書は、2004 年に南房総地域で行われた交通社会実験の実験内容について、理念から実施の報告までを、南房総観光連盟が受託し、その連盟員と千葉大学工学部デザイン工学科環境デザイン研究室が共同してとりまとめたものである。

ここでは、本研究に強く影響があると考えられる要素のみを整理し、その概要を示す。

3.1.1 基本方針について

交通社会実験を行う背景として、地域の振興について、以下のような基本方針が掲げられている。

南房総地域の振興にあたっては、観光を軸にしながら、関連産業との連携を促進し、海や花や新鮮で多彩な食材などをむすびつけた健康的な地域イメージをアピールする事業を展開する。また、観光については、従来の「日帰り観光」「高速観光」から「ゆったり・すこやか型観光」促進への転換をはかる。

つまり、高齢化社会の到来や、スポット観光の限界などから、南房総地域が観光を産業として取り入れ、地域そのものが活性化していくための新しい観光の概念として、「ゆったり・すこやか型観光」をテー

マとした事業を展開することを基本方針として示している。

3.1.2 事業導入促進計画について

上記の事業を具体的に展開するために、次の3つの計画が立案されている。

- ①「ゆったり・すこやか型観光」を促進するため、第1次交通と連携する選択可能な第2次交通や、これに連携する第3次交通手段を整備し、地域内に点在する交通結節点を核とする新たな地域交通ネットワークを構築する
- ②「ゆったり・すこやか型観光」を促進するため、第2次交通、第3次交通に連携する現場情報提供システムを構築する
- ③「ゆったり・すこやか型観光」推進の必要性を地域住民自身が認識し、互いに連携して具体的対応策を研究・実践する組織や場を設ける

ここで言う第1次交通等は、観光拠点に到着するための一つの交通手段のことを指している。主に、鉄道や自家用車、観光バスなどである。そして、第2次交通とは、到着した後の、地域内交通のことを指しており、コミュニティーバスなどを指しており、第3次交通とは徒歩やレンタサイクルなど歩行者が自力で移動することを指している。

つまり、多様な交通手段によって、結果的に歩行者がゆっくりと地域内を移動することを計画の目的としており、そのためには歩行者の視点で考えられた、案内標識が必要であると考えられている。

さらに、こうした地域的な取り組みは1次的に行われるのではなく、地域が内発的に取り組む必要があり、そのための組織作りまでも提唱されている。

3.2. 交通社会実験期間に設置した歩行者用案内標識の概要

3.2.1 散策観光者に対する情報提供の在り方に関する仮説

第2章で考察した図式(図2-7)と同様に、観光地においても、歩行者の進行にあわせた情報提供のあり方が必要であると考えられた。つまり、観光開始地点に到着したときに歩行のプランを構想する必要な情報、次に、歩行を開始してから様々な経路選択の際に必要な情報、さらに、よりいっそうその場の魅力が伝わるための情報の3つの段階である。(図3-11)

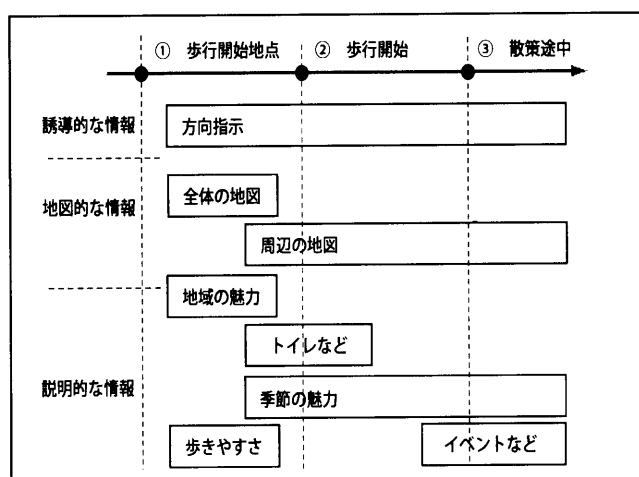


図3-11: 3つの段階と3つの類型

また、情報の内容についても同様に「誘導的な情報」と「空間的な情報」に分け、さらに観光地の魅力を伝える「説明的な情報」を加えた3種類に整理し、3つの段階にあわせて伝えることで有効に機能するという仮説を立てた。

この3つの段階と類型に関する仮説を、図3-11のような図式に整理し、これを実験的に設置する歩行者用案内標識の基本的な考え方として計画に反映をしている。

(1) 散策歩行の展開における3つの段階

この図式で示される仮説では、3つの段階に即して以下に示すような情報が必要になると考えている。

①「歩行開始地点」で必要な情報

歩行開始地点では、散策が豊かなものになるように、これから歩行する場に関してより多くの情報が求められる。

そこで、まず地図的な情報提示によって、対象空間の全体像の把握を可能にすることが必要である。そして、その地図的な情報提示に関連して、時間的な情報や、説明的な情報を複合的に示し、歩行者に散策を構想できるようにすることが必要である。

②「歩行開始後」に必要な情報

散策を始めた歩行者は、構想したプランを実行する際に、現在の歩行を進めている経路が、どのように接続していくのか理解する事が必要になる。

よって、とまどうことなく歩行を実行できる、誘導的な情報が求められる。

③「散策途中」で必要な情報

ある程度歩行が進行し、開始地点で構想した歩行の実行途中では、歩行をしたことで認識できた現場の空間情報を元に、歩行計画の修正や新たな計画の構想など、改めて構想を展開することが考えられる。

そこで、これらの要求に応えるために、その場の魅力を伝える説明的な情報提示を行い、散策そのものを目的とした行動が、持続的に展開可能になるようにする必要がある。

(2) 散策歩行を促進する現場情報の3つの類型

この仮説で考えられる、散策を促進するための3つの種類の情報は、以下に示すような内容を持つことが必要だと考えている。

① 誘導的な情報

歩行開始地点から構想したプランの通りに歩行を進めるために必要な情報であり、また、経路の接続状況を案内し、迷うことなく進行することを促すためにも必要な情報である。この誘導的な情報には、

関連して、距離や所用時間などの間隔を示す情報が加えられることで、より経路を間違えることなく、確実に進むことが可能になる。

② 地図的な情報

歩行開始地点で、散策の対象となる地域全体の空間的な広がりを理解するために必要な情報である。歩行開始地点だけでなく、散策途中においても、現在地を中心とした空間的な広がりを示すような、部分的な地図情報の提示も重要である。地図的な情報は、現在位置の情報も合わせて示す必要がある。

また、地図情報では、単に地理的な情報にとどまらず、コースと他の交通手段との連携に関する情報や、空間把握の手がかりとなると考えられるランドマーク的な情報も必要である。

③ 説明的な情報

歩行開始地点では、散策の計画を構想するために、どのような経路を歩くと、その場の魅力が得られるかを想像する必要がある。そのため、そのような魅力に関する説明をした情報は、観光のための散策には重要である。また、道の起伏状況や足下の状況に関する説明や、季節で変動するような魅力など、より詳しい説明情報も有用である。さらに、歩行途中では、次の散策のきっかけにもなるような、様々な魅力を得るためにも、その場の説明情報は必要である。

3.2.1 富浦町における実験的設置^{*2)}

(1) 全体構成に関する考え方

富浦町の遊歩道の特性は、地形的な特徴から巡ることができるループ状の閉じたコースとなっていることがあげられる。(図3-12)そして、従来から行われている「駅からハイキング」においても、このループ状のコースを周回するように計画されていることから、今回の計画においてもこれを踏襲し、JR富浦駅前を起点として、案内標識の設置箇所ごとに順



図 3-12: とみうら遊楽散歩道 案内標識 配置図

番号をつけ、地図的情報の中や、あるいは説明的情報の中にその番号を表示する。コースがループ状で簡単のため、誘導的案内標識を主要な分岐点に設置し、その設置場所がコース上のどの位置にあるかを、番号と矢印を同期させて理解できるようにする。

法華崎などの様に、すでに観光スポットとして認知されているが、遊歩道から離れている場合、観光の要素としては魅力的であるため、既定の遊歩道からは離れて向かうことが出来るようにオプションコースを用意する。そして、そのコースへの分岐となる地点には、地図的情報の中にそのコースを明示し、誘導的情報も付加する。

説明的情報の提示は、観光客がコース周辺の魅力を自ら発見する事が可能になるように、案内標識の盤面の一部に、写真を用いた「謎解き」的遊びの要素を取り入れる。さらに、社会実験期間中の期間限定であるが、連携の利用によって移動が容易になると考えられる公共バスとの関係を、地図的情報の関連づけて、時刻や路線などをわかりやすく示す。

このような基本的な考え方に基づいて、合計 31 カ所を実験的に設置した。(図 3-12)

(2) 案内標識構成要素に関する考え方

① 地図的情報表示に関する考え方

遊歩道の起点となる JR 富浦駅前では、地図的情報提示を行う。(図 3-13) この地図には、案内情報標識の設置ポイントが、番号によって表示されている。さらに、コース全体の中での現在位置や、近くの公衆トイレの位置を示している。



図 3-13: 地図的情報表示例

② 誘導的情報表示に関する考え方

コースが単純なループ状であることを生かし、誘導的情報は設置した案内標識を同じ色彩とスタイルで統一することで、連続したコース上にあるが理解しやすいようにする。そして、番号と矢印によって、その設置場所から連続的に経路を認識しやすいようにする。(図 3-14)



図 3-14: 誘導的情報表示例

③ 説明的情報表示に関する考え方

歩行者がコース周辺の魅力を自ら発見するきっかけとして、写真を用いた「謎解き」的遊びの要素を取り入れている。

この例では、近くの岩場に魅力的な橋があることがヒントとして提示し、歩行者がその場所を注意深く探そうとする気持ちを喚起させることを意図している。(図3-15)



図3-15：説明的情報表示例

(3) 設置例

設置は、全体的空間配置の計画に従って行われているが、現実的な法規上の制限などを考慮し、最も想定した機能が発揮できるような箇所に設置をした。(図3-16)



図3-16：富浦町 案内標識の実験的設置例

(4) 案内標識補助としての携帯用パンフレット

本来であれば、現場情報案内としての案内標識が現地にあることで、特に何かを携帯することなく、自由に散策できることが望ましいが、実験的に



図3-17：携帯用地図

実施を行っているため、案内標識のみでは全てをまかなうことができない。場合によっては、全くコースから外れてしまい元の位置に戻れなくなる危険性もあるため、そのようなことを防ぐために携帯用のパンフレットを用意している。(図3-17)

歩行者は、このパンフレットを手にながら、コースを散策することとなっている。

3.2.1 千倉町における実験的设置^{*)}

(1) 全体構成に関する考え方

観光の拠点である道の駅・潮風王国を起点として広がる遊歩道を「汐の香コース」「露地花の里コース」「照葉樹の森コース」の3つに分けてコースの設定をした。汐の香コースは、自転車道を兼ねた海岸沿いの平坦なコースで、比較的単純なコースである。内陸部に展開するコースは、高塚山を含み木々の中を行く照葉樹の森コースと、変化に富んだ農道を巡る露地花の里コースで構成される。この様に、富浦町の単純なループ状の遊歩道とは異なり、千倉町では散策コースの周囲の場所の属性が異なる複数のコースによって構成されるネットワーク型の遊歩道となっている。(図3-18)

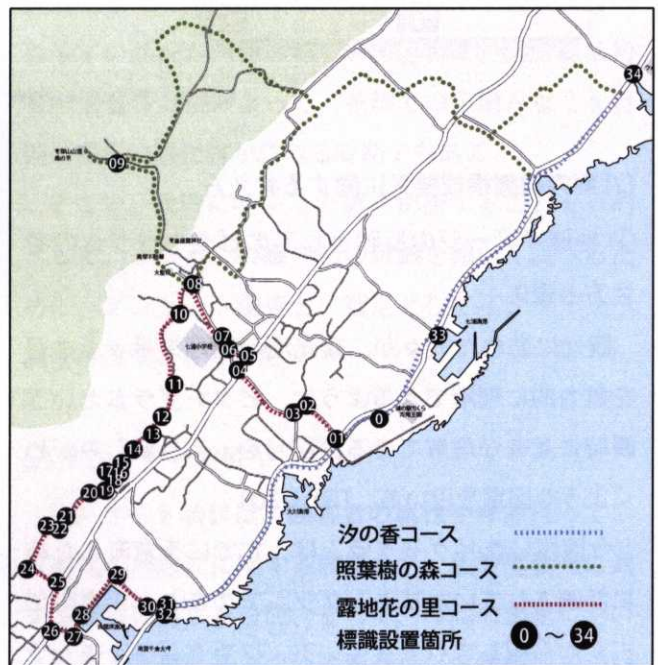


図3-18：千倉町 里山遊歩道 案内標識 配置図

コースの起点である道の駅「ちくら・潮風王国」には、全コースを含む当該地域の地図と関連する誘導情報、説明情報を合わせた総合案内標識を設置する。

その他の設置場所には、表示板の最も高い位置に、その場所が、どのコース上にあるのかを示すヘッダーを設ける。ヘッダーの下には、設置箇所の状況に応じて、必要な枚数の誘導表示を配置する。さら

に、必要に応じて説明表示を併設する。このような基本的な考え方にに基づき、合計 35 カ所設置した。(図 3-19)



図 3-19：プレートの実施例

(2) 案内標識構成要素に関する考え方

① 地域イメージの反映としてのピクトグラムの考 え方と適応

観光に訪れた人々が、観光地の観光スポットなどを魅力的に理解できるように、ピクトグラムという瞬時に意味が理解できる図記号を、より親しみがわくような図案を用いる。(図 3-20)

今回用いたピクトグラムは、すでに千倉町のために計画されていたピクトグラム⁴⁾であり、千倉町で古くから親しまれてきている、ツチクジラをキャラクターとして用いたものである。このピクトグラムは、地元住民の印象評価も高く、ピクトグラムとし



図 3-20：つちクジラをモチーフとしたピクト例

ての情報伝達力も一般的なピクトグラムを上回る優れたデザインであることが、すでに立証されているものである。

② 誘導的表示に関する考え方

最上部では、設置された場所のコース名を大きく記し、その下には、目的地までの情報を載せたプレートとを並列させる。プレート自体が矢印となり、手前奥行き方向に対してはプレートを折り曲げ、プレート自体で誘導情報を伝えている。

誘導的表示は2つの方法で提示している。一つがヘッダーと呼んでいるところで、これは、全ての案内標識が設置される箇所が一番上部に設置し、現在いる場所についての情報をコース名と場所の2つの側面から表示している。

次に、その下にはプレートと呼んでいる誘導的表示によって、目的地と、その目的地近辺のコース名、そして、距離と時間を示している。また、第1の目的のさらにその向こう側にあり、第2の目的になり得るスポットを同じプレート下部に小さく表示している。(図3-19)

大きさは、景観を乱すことがないよう最小限の大きさとなることを考慮し、W320mm×H80mmとなっている。

③ 地図的表示に関する考え方

遊歩道の起点である「道の駅」潮風王国前に設置する総合案内標識で表示する。地図表示では、遊歩道を構成する「露地花の里コース」「照葉樹の森コース」「汐の香コース」の3つのコースを特性に合わせた色分けをすることで識別性を高める。

さらに、点在する魅力を表現したピクトグラムをコース近辺に配置することで、一見して周囲に魅力が存在する状況を分かるようにする。(図 3-21)

大きさは、誘導表示の大きさを基準に決定しており、W640mm × H640mm となっている。



図 3-21：全体地図 (W640mm × H640mm)

④ 説明的表示に関する考え方

遊歩道における小さな魅力に気づき、楽しんでもらうため、案内標識を設置した周辺で見られる様々な魅力を取り上げ、写真と文章で表現する。(図 3-19)

(3) 設置例

35カ所の案内標識は基本的な考え方における方針に従って設置箇所を決定し、その場で求められる情報を状況に応じて構成し、景観性にも配慮して設置をした。(図 3-22)



図 3-22：千倉町 案内標識の実験的設置例

(4) 案内標識補助としての携帯用パンフレット

富浦町と同様に、案内標識を補助する媒体として、携帯用パンフレットにて、散策がより促進できるように考えている。



図 3-23：携帯用地図

4. 地域における散策観光の実態調査

4.1. 調査概要

4.1.1 調査内容

(1) 目的

交通社会実験が行われる1月から3月の期間は、調査対象地では、様々な側面から散策型観光が行われやすい状況が用意されている。特に、南房総は初春の温暖な気候によって、花畑での花摘みなどを目的に多くの観光客が訪れる時期でもある。

そこで、散策に関する実態を把握することを目的として、より多くの観光客の意識を幅広く調べるために、アンケート調査と、補足としてインタビュー調査を行うこととした。

(2) アンケート項目

アンケート項目は、回答者の属性や今回行っている観光の内容に関する設問から、散策型観光に対する意識に関する設問、そして、今回の観光において散策を実際に行っている場合は、実体験に基づいた散策の実行に関する要求を聞き出す設問などで構成している。

アンケート用紙はA3サイズに表裏両面刷りとし、3つ折りにして作成してある。表面が、観光者全員に対する設問で構成され、裏面が散策観光を行った場合のみの設問で構成されている。ここでは便宜的に表面の設問群をAとし、裏面の設問群をBと呼び分けることとする。(図 3-24, 3-25)

南房総地域の現場案内情報に関するアンケート調査

千葉大学工学部環境デザイン研究室では、従来から、南房総地域の観光の可能性や、現場での情報提供のあり方などについての研究に取り組んでおります。今回、その一環として、観光の際に必要な案内情報に関するアンケート調査を実施することになりました。つきましては、ご多忙のところまことに恐縮ですが、この調査にご協力願いますよう、お願い申し上げます。なお、このアンケートは無記名であり、回答していただいた内容は統計的に処理され、研究目的以外には使用されません。

千葉大学工学部環境デザイン研究室
環境デザイン研究室
学生
吉谷地裕、松尾拓弥、田中史明、寺岡聖生、河辺夏美、坂口晴子、指野教信
清水忠男、佐藤公保、伊賀道
電話/FAX: 043-290-3108

以下の質問にお答えください。問題数は全部で2ページです。
*質問には1つだけ選択するものと、複数を選択するものがありますので、ご注意ください。

1 現在のお住まいはどちらですか？
() 都・道・府・県 () 市・区・町・村

2 年齢について伺います
□ (1) 10代 □ (2) 20代 □ (3) 30代 □ (4) 40代
□ (5) 50代 □ (6) 60代 □ (7) 70代 □ (8) 80代以上

3 性別について伺います
□ (1) 男性 □ (2) 女性

4 どのような職業に就いておられますか？
□ (1) 会社員 □ (2) 自営業 □ (3) 公務員
□ (4) 団体職員 □ (5) パート・アルバイト □ (6) 主婦
□ (7) 学生 □ (8) 無職 □ (9) その他

5 今回の旅行はどのようなものでしたか？
当てはまる番号をそれぞれ1つだけ選んで点をつけてください。
(交通費以外の予算)
□ (1) 1万以下 □ (2) 1万～2万 □ (3) 2万～3万
□ (4) 3万～4万 □ (5) 4万～5万 □ (6) それ以上
(宿泊数)
□ (1) 1泊 □ (2) 1泊 □ (3) 2泊
□ (4) 3泊 □ (5) 4泊以上 □ (6) 特に決めていない
(同行者)
□ (1) 一人 □ (2) 家族・親戚 □ (3) 友人
□ (4) 恋人 □ (5) 団体 □ (6) その他 ()

6 今回の旅行では、散歩道、あるいはハイキングコースを歩きましたか？
□ (1) はい □ (2) いいえ

7 南房総地域にはどの程度の頻度で訪れますか？
□ (1) 初めて □ (2) 年に数回程度 □ (3) 数年に一回程度

8 今回の旅行の予定のうち、現地を決めた予定は何ですか？
□ (1) 見どころ、観光スポット □ (2) 宿泊の場所
□ (3) 食事をする場所 □ (4) 目的地までの行きかた
□ (5) 特になし □ (6) その他 ()

9 今回の旅行には、どのようなことを期待していますか？
当てはまるものをいくつでも選んで点をつけてください。
□ (1) この観光をつじた新しい出会いがあること
□ (2) 地元の人たちと会話をすること
□ (3) 様々な発見をすること
□ (4) ゆったりとくつろぐこと
□ (5) 一緒に来た仲間・家族と親睦を深めること
□ (6) 南房総ならではの体験をすること
□ (7) おいしい料理が食べられること
□ (8) その他 ()

10 徒歩、またはレンタサイクル(貸し自転車)による散策をしましたか？
当てはまる番号を1つだけ選んで点をつけてください。
□ (1) 徒歩のみ
□ (2) レンタサイクル(貸し自転車)のみ
□ (3) どちらもした
□ (4) どちらもしていない(設問14へ)

11 設問10で、(1)、(2)、(3)を選んだ方にお聞きします。
その理由はなんですか？当てはまる番号をいくつでも選んで点をつけてください。
□ (1) 地元の人とふれあいやいから
□ (2) 自然景観を味わえるから
□ (3) 手ごろな見どころが案内されているから
□ (4) 手ごろな見どころを以前から知っているから
□ (5) 乗り物がしやすいから
□ (6) ゆっくり自分のペースで動けるから
□ (7) その移動手段そのものが、楽しみの1つだから
□ (8) 健康に良いから
□ (9) その他 ()

12 設問10で、(1)、(2)、(3)を選んだ方にお聞きします。
徒歩や、レンタサイクル(貸し自転車)で散策をするときに、以下の(1)～(7)の情報を何から得ましたか？
選択肢(イ～ヌ)からいくつでも選び、表に書き入れてください。
ただし、必要とならなかった情報については、空欄にしてください。

(1) 見どころ、観光スポット	(設問15へ)
(2) その日の観光イベント	(設問15へ)
(3) 目的地までの行きかた	(設問15へ)
(4) トイレの場所	(設問15へ)
(5) 食事をする場所	(設問15へ)
(6) 病院の場所	(設問15へ)
(7) 宿泊の場所	(設問15へ)

13 徒歩や自転車による散策は、どの地域が印象に残りましたか？
当てはまる番号をいくつでも選んで点をつけてください。
□ (1) 砂浜 □ (2) 磯
□ (3) 花畑 □ (4) 緑豊かな小道
□ (5) 見晴らしの良い丘 □ (6) 緑生い茂る山
□ (7) 商店街 □ (8) 農耕地
□ (9) 漁港 □ (10) その他 ()

14 設問10で、(4)「どちらもしていない」を選んだ方にお聞きします。
どのような情報が用いられれば、徒歩や自転車による散策をしようと思われませんか？
当てはまる番号をいくつでも選んで点をつけてください。
□ (1) 見どころや、内容の情報が用いされている
□ (2) バスなど、途中で乗り換えられる交通手段の情報が用いされている
□ (3) おすすめコースの情報が用いされている
□ (4) その他 ()

15 徒歩や、レンタサイクル(貸し自転車)で散策をするときに、以下の(1)～(7)の情報を、何から得ることが望ましいですか？
選択肢(イ～ヌ)からいくつでも選び、表に書き入れてください。
ただし、必要とならなかった情報については、空欄にしてください。

(1) 見どころ、観光スポット	□ 地図で入手した観光パンフレット
(2) その日の観光イベント	□ 自転車用交通案内標識
(3) 目的地までの行きかた	□ 駅などに掲示されているポスター
(4) トイレの場所	□ 自分たち以外の観光客
(5) 食事をする場所	□ その他(枠内に書き込んでください)
(6) 病院の場所	
(7) 宿泊の場所	

16 徒歩、またはレンタサイクル(貸し自転車)で観光する場合、あなたにとって、どの程度の時間が適当ですか？
選択肢(イ～ヌ)からそれぞれ1つずつ選んで、表に書き入れてください。

(1) 徒歩	□ イ 30分未満 □ 30分～1時間
(2) レンタサイクル	□ ハ 1～2時間 □ 2時間以上

17 観光をしていて、わからない、わかりにくいと感じたことはありましたか？
当てはまる番号をいくつでも選んで点をつけてください。
□ (1) 見どころ、観光スポットの場所 □ (2) 季節の観光イベント
□ (3) 目的地までの行きかた □ (4) トイレの場所
□ (5) 食事をする場所 □ (6) コンビニやAIMなどの場所
□ (7) その他 ()

裏面へ進んでください →

図3-24：配布アンケート票 表

以下の質問は、歩行やレンタサイクルを利用して観光をされた方にお伺いします。
*それ以外の方は、以上で終了です。ご協力ありがとうございました。

1 今回の旅行で、歩行やレンタサイクルで目的地まで移動するときに、道に迷ったことはありましたか？
当てはまる番号を1つだけ選んで点をつけてください。
□ (1) 一度も迷わずに到着することができた
□ (2) 少しは迷ったことがあったが到着することができた
□ (3) 一度でも迷ったため到着できなかったことがあった

2 以下の案内で、あなたが分かりにくいと感じたものはどれですか？
当てはまる番号をいくつでも選んで点をつけてください。
□ (1) 観光ガイドブック
□ (2) 地元で入手した観光パンフレット
□ (3) 市販の地図帳
□ (4) チラシなどに載っている地図
□ (5) 自動車用交通案内標識
□ (6) 歩行者用の案内標識
□ (7) 特になし
□ (8) その他 ()

3 案内が理解できず道に迷ったとき、まっさきに何をしますか？
当てはまる番号を1つだけ選んで点をつけてください。
□ (1) 直感を頼りに移動する
□ (2) 地元の人に聞く
□ (3) 携帯電話で誰かに相談する
□ (4) その他 ()

4 もし、直感を頼りに移動をする場合、主に何を頼りにしましたか？
当てはまる番号をいくつでも選んで点をつけてください。
□ (1) 道路との関係
□ (2) 緑路との関係
□ (3) 地形(海、山、川など)
□ (4) 建物(公共施設、商店、神社仏閣、など)
□ (5) その他 ()

5 散策中、食事や、休憩、使用などの行為をするに当たって困ることはどれですか？
もっとも当てはまる番号を1つだけ選んで点をつけてください。
□ (1) その場所の内容、設備がわからないこと
□ (2) その場所までどれくらい離れているかわからないこと
□ (3) その場所への行き方がわからないこと
□ (4) 魅力がなく利用したいと思わないこと
□ (5) その他 ()

6 散策中、楽しいと感じたことについて
当てはまる番号をいくつでも選んで点をつけてください。
□ (1) 今まで知らなかった物事を見ることができたこと
□ (2) 移動中に示される案内標識が楽しく興味を引かれたこと
□ (3) ゆっくりおしゃべりしながら景色を見ることができたこと
□ (4) 適度な運動になり心地よかったこと
□ (5) 自由に休憩や食事などができたこと
□ (6) その他 ()

7 散策中、楽しくないと感じたことについて
当てはまる番号をいくつでも選んで点をつけてください。
□ (1) 変化のない景色
□ (2) 見所の少なさ
□ (3) 距離が長く身体的負担の多さ
□ (4) 案内標識の説明不足
□ (5) 案内標識の個性のなさ
□ (6) 様々な看板や標識の乱立による情報の不整理
□ (7) その他 ()

8 散策中に改めて発見したことや、なるほどと思ったことはありましたか？
当てはまる番号をいくつでも選んで点をつけてください。
□ (1) 温帯で穏やかな気候風土 □ (2) 地元の食材を使った料理
□ (3) 花畑の美しさ □ (4) 海の美しさ
□ (5) 地元住民の温かい心 □ (6) 田舎の風景の懐かしさ
□ (7) 漁村集落の生業の懐かしさ □ (8) 丸みを帯びた山並み
□ (9) 名産品(ピフ、くしら、など) □ (10) 名所旧跡(高家神社、など)
□ (11) 自然体験(味噌作り、稲刈り、など) □ (12) その他 ()

9 散策中に、より詳しく知りたいと思うことはありましたか？
当てはまる番号をいくつでも選んで点をつけてください。
□ (1) 温帯で穏やかな気候風土のしくみ
□ (2) 地元の食材を使った料理の由来
□ (3) 変化に富んだ海岸線のでき方
□ (4) 地元住民の生活・歴史風土
□ (5) 地域の様々な物語・伝説(南総里見八犬伝、代官橋、など)
□ (6) 南房総で見られる動植物(ツツクジャ、照葉樹林、草花など)
□ (7) 名産品の由来(ピフ、くしら、ひもの、など)
□ (8) 名所旧跡の由来(高家神社、高家不動尊、など)
□ (9) その他 ()

10 歩行者用の案内標識について、必要だと思う内容をいくつでも選んで点をつけてください。
□ (1) 現在歩いている散策ルートの名前
□ (2) 歩行者のための次の案内標識までの方向指示
□ (3) 今回の場所の地図
□ (4) 今見られる見所の説明
□ (5) 季節ごとの見所の説明
□ (6) 離れた散策ルートへの誘導
□ (7) 公共交通機関の案内(バス停の場所、時刻表、など)
□ (8) 近くの道の駅、駅までの所要時間
□ (9) 公衆トイレの位置
□ (10) その他 ()

11 有名な施設、お店、工房などを訪れる場合、どのような情報があると好ましく感じますか？
当てはまる番号をいくつでも選んで点をつけてください。
□ (1) その場所が有名となったわけ
□ (2) その場所の歴史についての短い説明
□ (3) オーナーや作家についての詳しい説明
□ (4) おすすめの体験内容(料理、ガラス工芸、花摘工など、)
□ (5) 周辺にあるおすすめの場所、有名な観光地
□ (6) バリアフリー情報

12 目的地に着いて、詳しく知りたいと思う情報は何でしょうか？
また、どのような情報が不足していたと感じましたか？
選択肢(イ～ヌ)からいくつでも選んで、表に書き入れてください。
(1) 知らない情報
(2) 不足していた情報

イ その地の歴史や物語、特徴
ロ 周辺にあるおすすめスポット
ハ その日の観光情報(イベント、釣りなど)
ニ 観光の情報がまとめて得られる場所
ホ トイレの場所
ヘ 食事などができる場所
ト 荷物を預けるところができる場所
チ 次の目的地までの行きかた
リ 公共交通機関の乗り場(バス、タクシー、レンタサイクルなど)
ヌ バリアフリー情報
ル その他(枠内に書き込んでください)

13 どんなきっかけがあったら地域住民と話してみようと思いますか？
当てはまる番号をいくつでも選んで点をつけてください。
□ (1) 趣味や嗜好などの共通の話題があることが分かったとき
□ (2) こちらの知りたいたいことを教えてくれるとき
□ (3) 挨拶などのちょっとした声かけがあったとき
□ (4) きっかけがあっても話したいとは思わない
□ (5) その他 ()

14 目的地へ着いてから、予定を変更して別の場所に向かうとき、きっかけとなるものは何ですか？
当てはまる番号をいくつでも選んで点をつけてください。
□ (1) その場にある案内板
□ (2) 手持ちのパンフレット
□ (3) 途中に出会った人の話
□ (4) 興味を引くものを見つけたこと
□ (5) その他 ()

15 その他、何か、お気づきの点がありましたらお書きください。

ご協力ありがとうございました。

図3-25：配布アンケート票 裏

① 回答者属性（問 A-1 ～ 4）

回答者属性は主に以下の項目について聞いている。住まいについての質問項目は、どれくらい離れた地域から来訪するかによって、散策型観光の内容に影響があると想定できるため設問を用意している。

「住まい」「年齢」「職業」「性別」

② 回答者の観光スタイル（問 A-5 ～ 8）

回答者の観光スタイルとは、主に以下の内容について聞いている。今回の回答者が行った観光の具体的な内容を問うものである。

「予算」「宿泊数」「同行者」「散策行為の有無」「南房総の来訪頻度」「現地で決める予定」

③ 散策型観光に対する意識（問 A-9 ～ 17）

散策型観光に対する意識では、今回の観光で散策を行っていない場合でも、散策に関する一般的な意識について問うものである。

「南房総に期待するもの」「散策における移動手段」「その移動手段を選ぶ理由」「散策を行うときに必要な情報と媒体」「散策型観光を促進するのに必要な情報と媒体」「散策観光に適切な時間」

④ 散策行為の実際（問 B-1 ～ 15）

散策行為の実際に関しては、実際に散策を行った場合のみ回答を行うよう説明を加えた。内容は、今回の観光で実際に行われた散策に関連した問いで構成されている。

「散策で印象に残った地域」「散策時に不備な情報と媒体」「案内がないときの散策者の行動特性」「散策時最も必要な情報」「散策における心理的充足要素」「歩行者用案内標識に必要な情報」「現場情報案内の影響度」

(3) インタビュー項目

インタビューでは、実際に調査対象地で散策を行っている観光客に対して、直接意見を聞くことで、アンケートでは調査しきれない個別的な意見の把握を

することを目的とする。方法は、主に以下の内容の設問項目を用意し、現地の観光客に直面して設問項目に沿って聞き取るようにしている。

① 回答者属性

設問の構成はアンケートと同等とし、次の要素を問うている。

「住まい」「年齢」「職業」「性別」

② 回答者の観光スタイル

この項目も、回答者属性同様、アンケートと項目と同様の内容を聞いている。

「予算」「宿泊数」「同行者」

③ 散策型観光に対する意識

この項目も、アンケート項目と同様であるが、地域住民とふれあうことについて問いかけ、散策で得られた予期しない楽しさなどがどれだけ展開されているか把握しようとしている。

「散策における移動手段」「その移動手段を選ぶ理由」「散策型観光を促進するのに必要な情報と媒体」「地域住民とふれあいのエピソード」

④ 散策行為の実際

アンケートの項目に加え、インタビュー調査でしか表現できないような、より具体的な場所や、直感的な印象などを把握しようとしている。

「散策で印象に残った具体的な地域名」「散策時に不備な情報と媒体」「不備の具体的な内容」「南房総の印象」「南房総で他人に紹介したいこと」「南房総観光の改善ポイント」

4.1.2 調査方法

アンケートは、調査対象地域の中で、もっとも観光客が多く集まる観光拠点において、アンケート用紙を手渡しで依頼し、後日郵送にて回収する方法をとった。

多くの観光客に配布を行うことができたが、これから観光を始めようとする段階の人が、予想で回答することを少なくするために、アンケート配布の時間が早い段階では、観光を終えてから記入してもらうように注意を呼びかけている。

インタビューにおいては、実際に仮説的な案内標識が設置されている遊歩道付近で散策をしている観光客に対してインタビュー項目に基づいた質問用紙をもとにして意見を聞き出している。

(1)「とみうら遊楽散歩道」における調査実施概要

① アンケート調査概要

・アンケート調査実施日

2004年2月15日(日)、10:00-17:00 晴れ

2004年2月21日(土)、10:00-17:00 晴れ(JR「駅からハイキング」実施日)

・アンケート配布場所

JR 富浦駅、道の駅「とみうら・枇杷倶楽部」、富浦町遊楽散歩道

・配布部数／有効回収数

2004年2月15日(日)、500部(有効回収部数133部)

2004年2月21日(土)、500部(有効回収部数107部)

② インタビュー調査概要

・インタビュー調査実施日

2004年2月15日(日)、10:00-17:00 晴れ

2004年2月21日(土)、10:00-17:00 晴れ(JR「駅からハイキング」実施日)

・インタビュー実施場所

JR 富浦駅、道の駅「とみうら・枇杷倶楽部」、富浦町遊楽散歩道

・インタビュー回答者数

2004年2月15日(日)、65人

2004年2月21日(土)、16人

(2)「千倉町里山遊歩道」における調査実施概要

① アンケート調査概要

・アンケート調査実施日

平成16年2月22日(日)、10:00-17:00 晴れ

・アンケート配布場所

道の駅「ちくら・潮風王国」、里山遊歩道

配布部数：500部(有効回収部数63部)

② インタビュー調査概要

・インタビュー調査実施日

平成16年2月22日(日)、10:00-17:00 晴れ

・インタビュー実施場所

里山遊歩道

・インタビュー回答者数

29名

4.2. 調査分析

富浦町の調査日の一つである2004年2月21日は、JR 富浦駅を起点とする「駅からハイキング」がおこなわれた。この「駅からハイキング」では、約1200人が参加し、当日は、今回の実験対象となった「とみうら遊楽散歩道」を歩いている観光客のほとんどがこの企画の参加者となっていた。(有効回答107のうち100名が参加者) 回答者の中には、「駅からハイキング」とは関係なく来訪しているものも数名いるが、当日は「駅からハイキング」参加者が大勢で散策をしている状態であるため、自ずと、その環境の影響を受け「駅からハイキング」に当初から参加することと同じ状態となっていると考えられる。

そこで、「とみうら遊楽散歩道」「千倉町 里山遊歩道」の2つに「とみうら遊楽散歩道における駅からハイキング」を加えた3つの場面に分けて考察を進めることは妥当であると考えられる。

4.2.1 アンケート調査に関する分析

全体のアンケートの有効回収率は、1500の配布に対して回収部数が303部有り、24%となっている。観光の最中で配布されたアンケート用紙を持ち帰り、郵送によって送付しなくてはならないため、この方式としては平均的な回収率だと云える。

アンケートの質問項目は、前述のように①回答者属性、②回答者の観光スタイル、③散策型観光に対する意識、④散策行動の実態、に分けて合計32の質問項目により構成されているが、特に本研究において重要な視点が見いだせる項目について取り上げ分析を行う。

また、分析はアンケートの集計結果をグラフ化し、考察を行う。グラフでは、それぞれの設問ごとに、「千倉町」「富浦町」「駅からハイキング」の3つの場面を比較できるようにし、それぞれのポイント数を数値で示して考察の対象としている。

(1) 来訪者の属性について

① 来訪地域について (問 A-1)

富浦では、千葉県内からの来訪者が最も多く、次に東京都、3番目が神奈川県である。神奈川県からの来訪者が少なかった理由は、富浦町が東京湾に面しているため、アクアラインを経由することで、比較的アクセスし易いことが要因と考えられる。一方で、千倉では、東京都からの来訪者がもっとも多い。

② 年代について (問 A-2)

富浦では、50代が3割を超え、40代から60代を含めると中高年で7割を占める。一方、千倉では、20代30代の占める率が約4割もあり、比較的若い世代も多く訪れているようである。

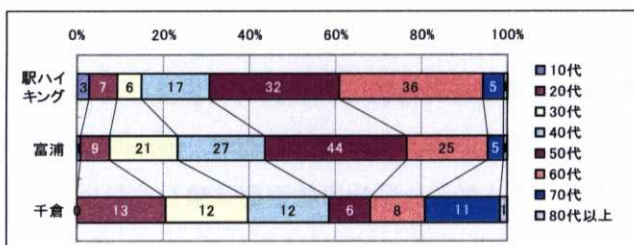


表 3-1

③ 同行者 (問 A-5)

全体的に、一人は少なく、家族や友人、団体が多い。駅からハイキングだけは、比較的1人の参加が多い。

全般的に家族や友だちのリクリエーションとして観光に來ていることが分かる。千倉に比較して、富浦の方が1人の利用が多い。

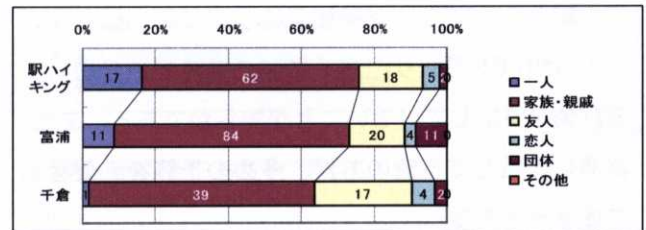


表 3-2

④ 来訪頻度について (問 A-7)

全体的に初めて訪れる人は少ない。特に富浦は年に数回訪れる人が多い。千倉は、初めての人は比較的多く、富浦に対して頻度は低いと云える。

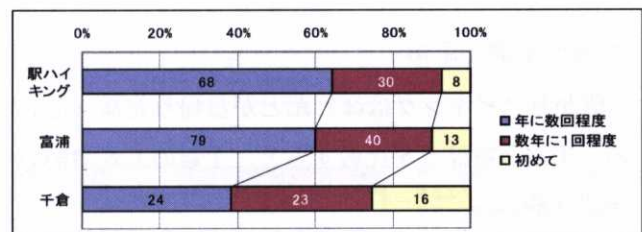


表 3-3

● 社会実験期間に訪れた観光客の特性

以上のことから、社会実験期間に調査対象地に訪れた観光客は、富浦では、高齢の世代で近郊から訪れることが多く、千倉では、若い世代で遠距離から訪れることが多い。これは、富浦は電車を使い比較的容易に來ることができるが、千倉は富浦より離れ、鉄道によるアクセスも容易ではないため、家族など複数人で自家用車を利用せざるをえないことが関係していると思われる。

つまり、富浦は、子育てが終わった様な世代が、夫婦で気軽に鉄道でて來るのが、観光客の傾向性だと云える。また、自家用車を使って、家族などの集団で訪れるのが千倉の観光客の傾向性と云える。

(2) 来訪者が行った観光の特徴について

① 予算 (問 A-5)

交通費以外の予算に関する設問である。富浦、千倉では、予算の設定値についてはある程度の幅があるものの、約半数が1万円から3万円と回答し、さらにそれ以上の額の回答も20%強あったのに対して、駅からハイキング参加者については、ほとんどが1万円以下であり、ハイキング以外の観光に対する行動を予定していないことが明らかである。また、富浦に比較して千倉の方が、多めの予算を必要としているようである。

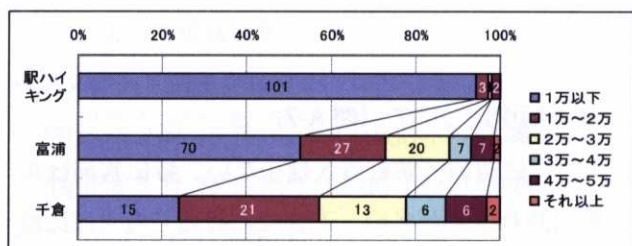


表 3-4

② 宿泊予定 (問 A-5)

駅からハイキングはほとんどが日帰りとなっている。千倉と富浦とを比較すると、千倉の方が宿泊の予定は多い。

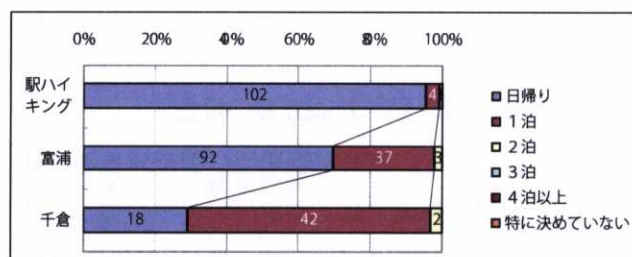


表 3-5

③ 現地で決めた予定について (問 A-8)

現地で決めた予定の内訳としては、「食事をする場所」「見どころ、観光スポット」が多い。食事は旅行の楽しみの一つだが、どこで何を食べるかということは、現地の情報、雰囲気などを考慮して決定していると考えられる。「見どころ、観光スポット」などは、一般的には現地に来る前に予定を決めることが多いと考えられるが、南房総の観光においては、現

地に来てから決定することが多いようである。これは、南房総の観光がそもそもスポット観光に適していない、ということが推察される結果である。

駅からハイキングの場合は、現地で決める予定が少ない。駅からハイキングの場合は、「ハイキング」というイベントに参加するという当初の予定の影響力が強く、現地で改めて予定を組み入れることがほとんど無いようである。

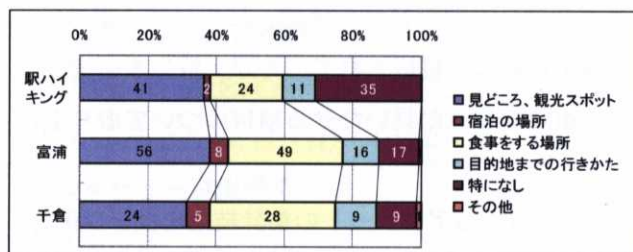


表 3-6

また、同行者の属性ごとに見てみると、恋人ときた場合は、全体的に現地で決める予定は少ないが、特に、ほかでは多い見所や観光スポットについてが全くないという特徴を示している。恋人と来る場合は、現地で決めるというよりは元々しっかりとした計画を立てて訪れるようである。また団体利用でも、「現地で決めた予定」が「特になし」が特徴的に多くなっており、団体旅行の規模にもよると考えられるが、団体行動をしている場合では、現地で予定を決めることは少ないようである。

つまり、現地に到着して、その場の状況から予定を決めて散策の行動をとるのは、家族や友人とともに行動する場合と一人で来た場合である。

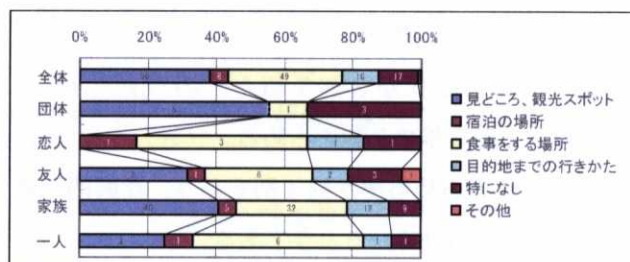


表 3-7

● 来訪者の観光の特徴

以上の結果より、多くの来訪者が、金銭的なゆとりを持って来訪し、現地の状況を体験した後に、食

事の場所や見どころを決めるという傾向があることが分かった。しかし、駅からハイキング参加者は、ほとんどハイキングのみを行動目的として来訪し、その行動目的を達成すると、すぐに帰るような観光の特徴がある。

駅からハイキングは、一見すると、散策を楽しむことが重視されているようであるが、自由な散策を行うというよりは、一つのイベント参加という目的を達成することが主眼となっているようである。同じように、団体旅行や恋人との旅行も、同様に行動目的を強く持つために、観光地において自由な散策を行う傾向は少ない。

よって、お金や時間のゆとりを持って、自由に散策観光を行う可能性が高いのは、イベントの参加などの強い目的を持たず、家族や友人または、個人で観光に来た場合であることが分かった。

(3) 散策型観光に対する意識について

① 散策の有無 (問 A-6)

駅からハイキング参加者は「散策をした」をほとんどが選択している。全体的に、駅からハイキング以外の場合を含めても、散策を行う場合は多く見られる。富浦よりも千倉の方が散策は多く行っていることから、何らかの散策を行いやすい状況があることが推察できる。(表 3-8)

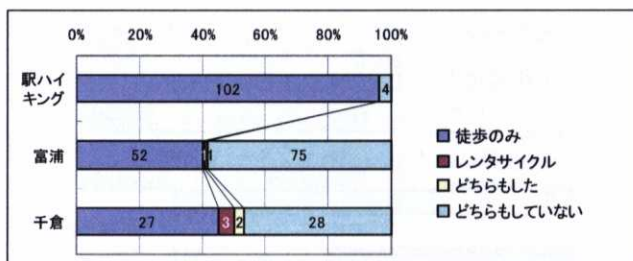


表 3-8

同行者の属性から集計し直して見ると、友人・恋人が同行者の場合は散策が行われることが少ない。このことは、現地で予定を立てる傾向が低い恋人を同行者とした場合、現実的に行われていないことが示されている。また、一方で、現地で予定を立てる可能性が高い友人同士の場合でも行われていない。(表 3-9)

つまり、友達同士の場合は、現地で予定を立てることはあり得ても、散策をする機会は少ないことが分かる。

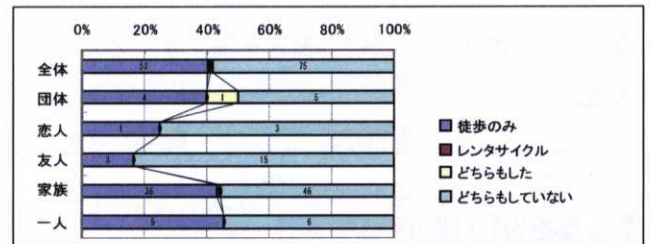


表 3-9

② 観光で期待すること (問 A-9)

駅からハイキングの場合は、「おいしい料理が食べられること」に対する期待度が低く、代わりに「様々な発見をすること」に関する期待度が高い。一方、千倉と富浦はともに、「様々な発見をすること」は少なく、「ゆったりとくつろぐこと」が逆転して多くなっている。

駅からハイキングのように、歩行に対して明確な意図がない千倉と富浦では、強い観光において何かを使用とする強い意図を持たない傾向がある。

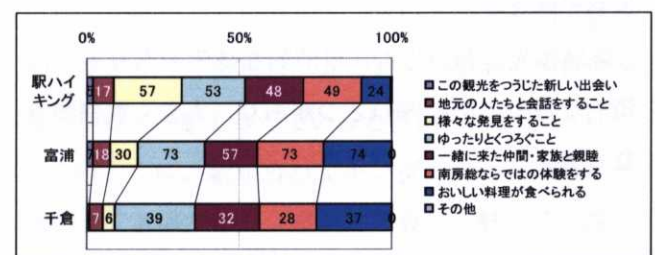


表 3-10

③ 散策を行った理由 (問 A-11)

駅からハイキングの場合は、「自然景観を味わえる」を理由にする度合いが低く、代わりに、「その移動手段そのものが、楽しみの一つだから」や「健康に良いから」を理由に上げる度合いが高い。これらからも、これまで考察したことと同様に、駅からハイキングの観光のあり方は、他の散策型観光に比べて、歩行に対する目的意識が高いことが分かる。一方、千倉と富浦では、「自然景観を味わえる」事が散策の理由として多くあげられ、歩くこと自体を目的とすることは少ない。のどかな自然の風景が広がる千倉と富浦で、ゆったりとくつろぐことを期待した人たちは、

散策をすることで自然景観を味わう事が実現されていると云える。

ここでいう自然景観とは、その地域の魅力的な空間である。つまり、散策を行う理由は現地の魅力的な空間を体験したいという要求を満たすことだと云える。

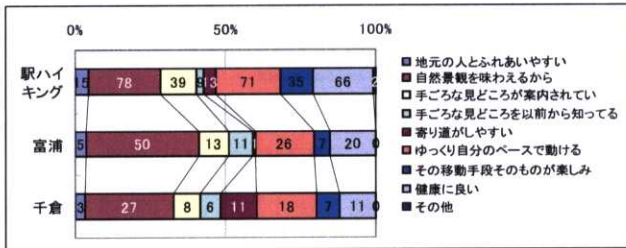


表 3-11

● 散策型観光に対する意識

南房総のような地域の観光地へ観光することの期待は、何か大きな目的があるというよりは、いわば無目的な「ゆったりとくつろぐ」事が多くを占めている。これは、イベントとして行われる駅からハイキングのような事業で行われる散策のあり方とは、性格が異なる。

地域観光においても、目的的な散策のあり方と散策的な散策のあり方の2つがあり、大きく性格が異なる。

(4) 地域観光における散策の行動特性

① 散策を行った地域 (問 A-13)

駅からハイキングでは、見晴らしのよい丘が最も多くなり、つぎが砂浜となっている。この2つは、指定されたとみうら遊楽散歩道上にある要素であり、ほとんどの観光客がこの遊歩道をたどっていることが分かる。

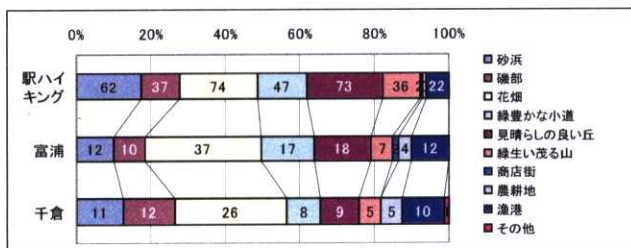


表 3-12

富浦では、花畑で散策を行うことが多くなっているが、観光拠点の枇杷倶楽部周辺にある花畑がよく利用されており、遊歩道近辺の花畑よりも多く散策を行っている。

千倉も花畑が多いが、富浦とは異なり、観光拠点の潮風王国近辺には花畑は少ないため、里山遊歩道周辺まで散策を拡げていると考えられる。

② 散策に適切な時間 (問 A-16)

駅からハイキングの多くが2時間以上とし、富浦の一般が1時間未満が多く、千倉が1時間から2時間が多くなっている。このことは、駅からハイキングが全体のコースを歩行すると、2時間以上かかるような設定となっており、コースには誘導のための案内標識が設置され、そのコースを歩行すること以外に選択の余地がほとんど無いことが要因である。富浦は観光拠点近くに花畑があるが、千倉は花畑が離れているため、富浦の方が適切な時間が少なく示されていると考えられる。

駅からハイキングは、途中で引き返すことや、別のルートを選択することは可能であったにもかかわらず、ほとんどの人が2時間の歩行を行っている。

これらのことから、散策に適切な時間は、その場の地理的状況に影響を受けるが、2時間以上かかったり、観光拠点から離れていても、適切に案内されていれば利用されることが分かる。

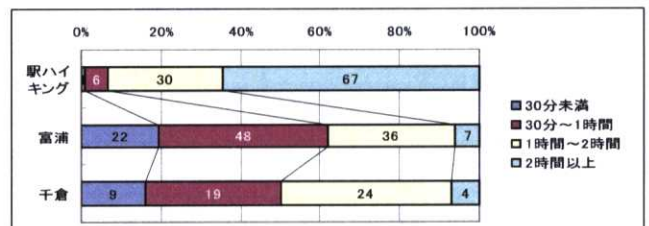


表 3-13

③ 散策中に迷うこと (問 B-1)

どの場合でも多くの割合で迷っており、迷わず目的地に到着することの方が少ない。しかし、迷うこ

とによって、目的地に到着できないほどの迷いではない。

駅からハイキングの場合がもっとも迷う割合が多くなっているが、もっとも案内標識に示された誘導表示にそってコースをたどるような歩行をしたのも駅からハイキングである。このことは、歩行のルートが決まっているため、はずれることを強く意識してしまうことが要因と考えられる。

また、富浦と、千倉では、富浦の方が迷う割合が少ない。千倉は多くの人が散策をした花畑が観光拠点から離れているが、富浦の場合は観光拠点の近くにあったためである。

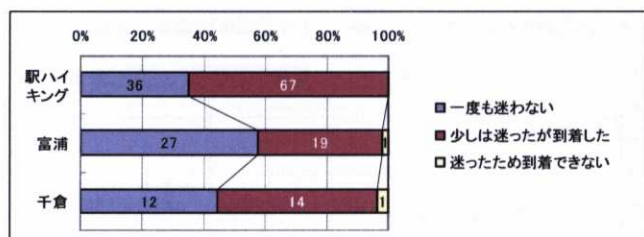


表 3-14

④ 散策中の印象に残ったこと（問 B-8）

駅からハイキングに比較して、富浦千倉は、自然体験や食事といった、実際に体験することの要素が多くなっている。駅からハイキングは、視覚的に楽しめる要素が多い。

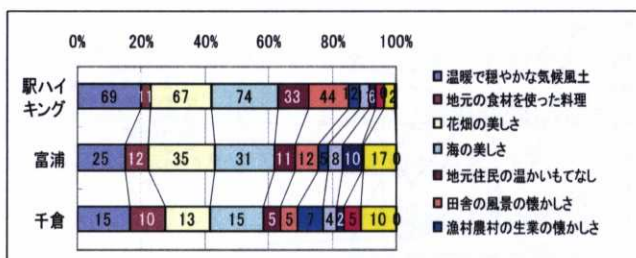


表 3-15

⑤ 散策中の楽しみと案内標識の位置づけ（問 B-7）

楽しいと感じることは、様々な要因があるが、その中で案内標識の割合は非常に少ない。しかし、一方で、楽しくないと感じさせる要因として、案内標識が多くあがっており、案内標識の不備に関する意向が示されていると考えられる。

案内標識は、散策を行う上でそれによって楽しくなると言うものではないが、無いと困るものであるということが強く示されている。

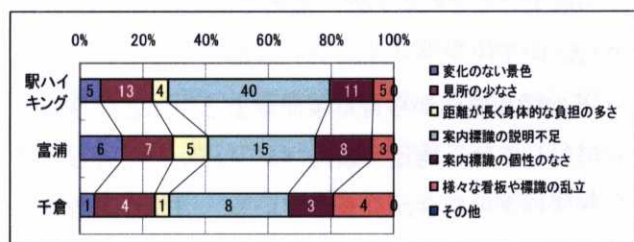


表 3-16

● 地域観光における散策の行動特性

駅からハイキングは、2 時間程度の間に既定のコースの歩行完遂を目指して散策し、散策の楽しみ方は途中の景色を見て楽しむ特性が強い。富浦と千倉は、観光拠点からの離る程度に差はあるものの、手近な範囲でその場の特徴的要素を体験して楽しむような散策を行っている。

また、どの場合においても、迷うと言うことはあるが、目的の場所まで到着できないほどにはなっていない。しかし、駅からハイキングの方が迷うことに対して問題意識は高くなっていることから、駅からハイキングの散策は、迷うことに関する抵抗感が強い歩行の状態となっていると考えられる。

このように、駅からハイキングで行われる散策は強い目的意識があり、富浦と千倉は手軽にその場で行うという際だった相違が見られる。しかし、どちらの場合も共通して、現場情報から主体的に歩行のプランを構想して、歩行を進めるような散策のあり方はほとんど展開されていない。

(5) 散策を実行する際の現場情報のあり方

① 現場情報と適切な伝達媒体の関係（問 A-12）

本設問の内容の散策途中で得た情報とその媒体の関係については、「駅からハイキング」「富浦」「千倉」では特徴的な差異は見いだせない。ここでは、それぞれを合わせて考察をする。

・散策観光者が実際に得た情報媒体を見ると、ほとんどの情報が、地元の観光拠点などで配布されて

いる観光パンフレットが多くなっている。宿泊の場所に関する情報のみが、ガイドブックで決定することが多い。これは、前もって宿を決定してから散策はなされるのが一般的であるためであろう。(表3-17)

・どの情報媒体から得る事が望ましいかという問いに対しては、地元の観光パンフレットに対しガイドブックの割合が高まっている。つまり、散策に関する情報が現地のパンフレットでは得られたが、事前に得られた方が望ましいということが読み取れる。特に、見所については、ガイドブックの方が高くなっており、現地に到着するまでの情報が不足していることが分かる。(表3-18)

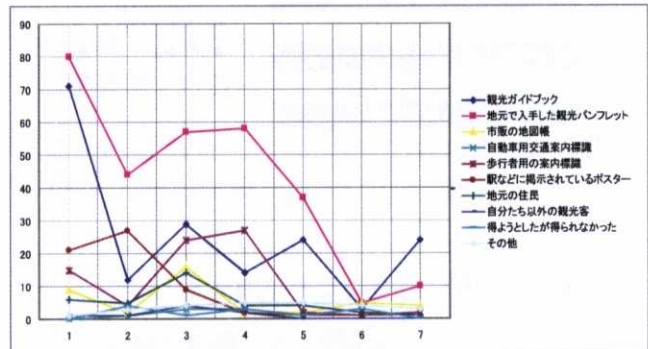
・歩行者用案内標識に関しては、目的地までの行き方や、トイレの場所についてが、観光パンフレットに次いでよく利用されている。観光パンフレットでトイレの場所の確認がよくされているのは、今回の実験期間中に散策歩行が行いやすいように検討されて携帯地図に、トイレの場所を記入してあるものがあったことによる。望ましい案内方法については、この2つの項目が歩行者用案内標識に対する要求度合いが高くなっている。つまり、今回の現状では、目的地までの行き方や、トイレの場所の案内については、案内標識に対する要求度合いは高いが、観光パンフレットで代用せざるを得ず、十分に対応し切れていないことが分かる。

・駅などに掲示されるポスターは、見所や、季節のイベントなどを知るためによく使われている。このことは、望ましい提供方法でも同様の傾向が示され、うまく機能していると評価できる。さらに、歩行者用案内標識も見所の案内として機能しているようである。しかし、望ましい媒体については、ポスターよりも案内標識が求められる傾向を示している。つまり、現状以上に、見所を案内する機能を取り入れることが求められていると云える。

・食事の場所に関する情報は、要求が非常に多い。観光ガイドブック以上に、現地で得られるパンフ

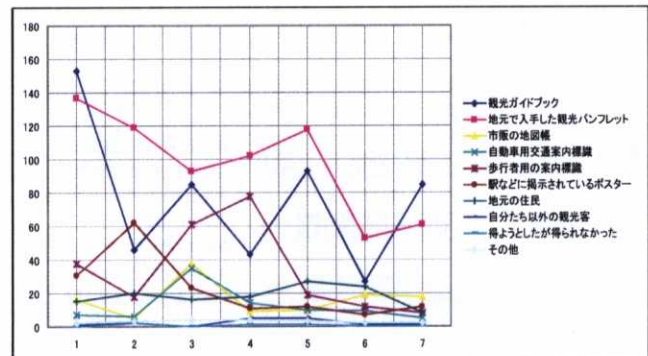
レットなどにも対する要求が多くなっており、現状ではこれらの要求に対して、適切に伝達できていないことが分かる。このことも、特にパンフレットのような媒体に限る必然性はないため、案内標識で表示することも考えられるだろう。

以上のことから、様々な情報に対する要求があり、特に歩行者用案内標識については、回答者が歩行者用案内標識に対する役割を限定している側面もあるため、目的地までの行き方と、トイレの場所、以外の機能に対する要求が多くはないが、現地でえられるポスターやパンフレットに記載する情報も歩行者用案内標識に取り入れることが可能なものもあり、案内標識の多角的な整備の可能性があると見える。



1, 見どころ・観光スポット 2, 季節の観光イベント 3, 目的地までの行きかた
4, トイレの場所 5, 食事をする場所 6, 病院の場所 7, 宿泊の場所

表3-17



1, 見どころ・観光スポット 2, 季節の観光イベント 3, 目的地までの行きかた
4, トイレの場所 5, 食事をする場所 6, 病院の場所 7, 宿泊の場所

表3-18

② 散策中の生理的欲求のために必要な情報内容 (問B-5)

移動の際に、求められる基本的な要求は、3つの場面とも、大きな違いが見られず、「どれぐらい離れ

ているかわからないこと」が最も多くあげられている。このような、基本的な要求を満たすための情報は、行き方よりその場所までどれだけ離れているかが重要だといえる。

実際利用するときには、行き方も重要な要素となるであろうが、離れ具合を特に気にするということは、散策の途中では、行き方を把握しながら移動するのではなく、離れ具合の把握で十分だということであり、散策を行うことに対する安心感につながると考えられる。

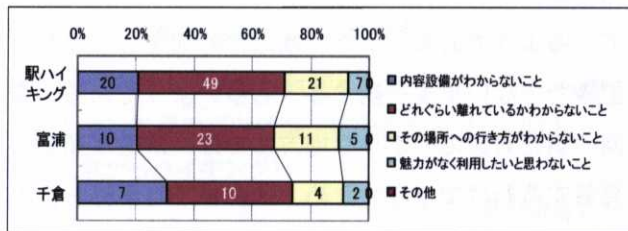


表 3-19

③ 歩行者用案内標識に求める情報内容（問 B-10）

ここでは、散策途中で、さらに、どのような情報が求められるか、多くの選択肢の中から選び、傾向を探っている。

駅からハイキングでは、誘導指示と、観光拠点までの所要時間に対して要求が多い。駅からハイキングは、決められたコースをたどっていく散策であるため、コースの方向を示す誘導指示に対する要求が高い。また、ほかの地域の例に比べて、時間をかけて歩行しているため、観光拠点にすぐその場所に戻るわけではないという状況が、所要時間に対する要求の高さにつながっていると思われる。

富浦に比較して千倉で今いる場所の周辺地図に対する要求が高い。これは、富浦では、観光拠点である枇杷倶楽部近辺でしか歩行をしていないために、常に拠点が見えることがランドマークとなり、地図による空間情報を得る必要がないことに対し、千倉では、散策が行われた地域が観光拠点である潮風王国から離れているため、散策をするために前もって対象地の空間情報を得て、プランを構想する必要があったと考えられる。

千倉と富浦ともに、トイレに対する情報が多く求められている。トイレに関する情報は、散策の安心感につながるため、どの位置にトイレがあるか不明であることは散策の展開に影響があると考えられる。

離れたコースの誘導はもっとも要望が少なく、要求の度合いは低い。富浦では、コースが1つに限られていたため、離れたコースを案内することがなかったが、千倉はいくつかの離れたコースを案内標識で示していたが、この結果によると効果は少なかったと云える。これは、離れたコースまで散策していこうという計画を持つこと自体がなかったということが推察できる。

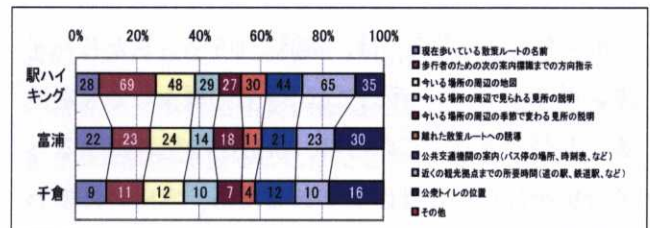


表 3-20

● 散策観光を実行するための案内情報について

現状は、まだ案内標識が十分整備されておらず、ガイドブックやパンフレットに頼らざるを得ないという状況が明らかである。そのほかにもポスター掲示なども頼りにせざるを得ず、この様に統一された情報媒体がないという状況を変えるためにも、歩行者用案内標識は必要不可欠なものだと云える。

散策は多く行われているが、駅からハイキングのように企画されていないと、観光拠点から離れることなく、簡易に行う程度となっているが、トイレなどの基本的な要求を満たすための所要時間や、どれくらい離れているかという情報が強く求められており、現場である程度離れたところまで散策を行うには、このような基本的な要求をしっかりと満たせるかどうかという情報は、不安を解消する上でも必要不可欠なものだと云える。

駅からハイキングのように、コースが明確に巡回している状況は、いわば限定された広い公園内を散策する状況に近く、現場の情報を元に計画を構想す

する必要もなく歩行をすることができるが、千倉のようにコースで散策の範囲が限定されていないような状況は、主体的に散策のプランを構想する必要がある、情報の欠如に対する不安感がより大きくなると考えられる。

また、さらに散策を展開するためには、公共交通機関との連携が必要だということも示されている。これも、いざというときの安心感にもつながるため、これらの情報提示を充実することで、安心して散策を展開することが可能になると思われる。

4.2.2 インタビュー調査に関する分析

インタビュー調査では、富浦で65名、駅からハイキングでは16名、千倉では29名の様々な意見を得ることができた。これらは、統計的な処理によって分析を行うことは困難であるため、本研究に関わる特徴的な意見を抽出し、考察をする。

(1) 散策観光を行うために必要な情報

「販売しているガイドブックにそのような情報があれば」(富浦)

「テレビ放映が少ない。毎年テレビで花畑の報道がされて、それを見てくるから。」(千倉)

「子供が楽しめるようなところがあれば」(千倉)

多くの人が観光を行うに当たりガイドブックを頼りにしていることから、まずガイドブックに散策観光が可能であるということが記されていないと行われにくいと云える。近年では、ガイドブックだけでなく、Webを使った情報の受発信も盛んにされているが、このような情報源との関係性も考慮する必要がある。

また、家族で来た場合に、子どもや高齢者などの体力的な問題のために、散策ができないことも示されている。このことは、様々な世代を想定したコース設定や、コースの案内、また情報の表示が必要であることを示唆している。

(2) 散策を実行する際に必要な情報

「トイレが多く設置してあるところは安心するが、全くないところもあり、この違いにとまどった。」(富浦)

「駅前に何もなくて、電車を待つ時間の過ごし方として、どうしていいかわからなかった。」(駅からハイキング)

「バスの乗り場。」(富浦)

社会実験期間に設置した案内標識ではトイレの表示などもされていたはずであるが、すぐには周知されないため、その存在を知らずに、その他の道路交通標識を手がかりにしまったために困難を感じているようである。また、鉄道の時刻をしっかりと把握できないまま行動する人も多いようである。今回の調査対象地のような地方には、鉄道は頻繁に発着するわけではないため、駅に来て電車待ちに1時間かかることは一般的なことである。このようなことに気づかず予定を組んでしまい、困惑する状況を避けるためにも、様々な情報の提供が必要である。

(3) 散策用のための案内情報の在り方

「受付でいろんなチラシをもらったけど、どれを見るときよく案内されているかわからないから、黄色のチラシに載ってる地図が他と同じようなのでそれを見て歩いた。パンフの地図は歩行者案内標識に対応しているようだけど、結局パンフは使わなかったの、歩行者用標識もわかりづらかった。」(駅からハイキング)

「毎年来ていて必要ない。」(富浦)

観光地では、様々な案内が入り乱れている。パンフレットにしても観光案内所で様々なパンフレットが並んでいる。そのパンフレットには地図が載っているものもあり、それらの整合性や、どの情報が最も信頼できるかが一見して分からない。そのため、最初に目にした媒体で、特に注意を引く要素があった場合、結果として自身が求めている情報内容が正しく表示されていない場合でも、その案内を手がかりに行動してしまうことが多い。

今回の駅からハイキングでは、携帯用のパンフレットと現場案内案内標識は、それぞれ関連して分かりやすい仕組みとしていたが、多くの参加者は、クー

ポン券が付いてあるチラシに注意が行き、そこに地図が載っていたので、それを頼りに行動してしまっていた。このことが混乱の要因ともなっている。

また、来訪者の経験度合いによっても必要な情報は異なり、経験が豊富な場合は、全く必要ないという意見もある。

よって、様々情報の中から、来訪者の属性に対応し、求める情報が明確に選び出せる提示の仕方が必要だといえる。

(4) 利用した案内標識に関する評価

「駅からハイキングの参加は初めてだったが、特に不満はない。歩行者用の案内標識が整備されていたのは良かった。」(駅からハイキング)

「駅からハイキングの案内はなかったけど、町が設置した案内案内標識で十分だった。」(駅からハイキング)

「駅からハイキングに関わらずまた家族できて、ハイキングを楽しみたい。」(駅からハイキング)

「駅からハイキングとしての表示をしてほしい。」(駅からハイキング)

「パンダの公園の案内があって楽しかった。」(駅からハイキング)

「近くであるようでいて遠い。かかる時間や距離が分かるといい。」(富浦)

「案内標識は分かりやすいし、丁寧でいい。雰囲気がいい。」(千倉)

全般的に駅からハイキング参加の人は、駅からハイキングという一つのバック旅行を楽しんでいるような側面がある。他の駅で主催されている駅からハイキングの形態と異なっていると、それに対して違和感を持ってしまっている。このことから、自由な気持ちで散策を楽しむ状態とは異なる楽しみ方がされているようである。よって、駅からハイキングの参加者からの意見で、従来のハイキングの案内のあり方から今回のような形式に変わったことについてのとまどいや、整合性についての意見が多くあげられたのは、当然のことだと考えられる。

一方で、初めて駅からハイキングに参加した人や、駅からハイキングの広告を見たものの、他の日に来

たという人にとっては、今回設置した案内板について高い評価をしていた。

しかし、よいと評価をしている場合でも、今回得られた評価の多くは、案内標識の詳細に関する評価と言うよりは、今まで無かったところに新しくできたという事実に対する評価である可能性も高い。そのため、いずれにしても、今回設置した案内標識に関する評価は明確には判断できない。

4.3. 地域観光における散策歩行の特性と案内標識に対する要求の傾向性

これまでのアンケート調査およびインタビュー調査の分析の結果、地域観光における散策歩行の2つの特性と、歩行者用案内標識のあり方に関して次のような傾向性を見ることができた。

4.3.1 地域観光地における散策歩行の特性

(1) 既定の計画に基づく歩行

自然豊かな観光地において、歩くことそのものを目的とする傾向が強い駅からハイキングや、花を摘むことを強い目的とした花摘みなど、一見散策歩行をしているようではあるが、一つの目的を達成するという、既定の計画に基づく散策の形態が多く見られている。これは、現場の情報を得て、その場で歩行を判断するような散策のあり方とは異なるものだと云える。

団体旅行や、恋人との旅行でも、自由な散策は行われにくいと云え、現状では散策以外の目的がある場合は行われにくいと云える。

駅からハイキングに特徴的に見られる散策のあり方は、第1章の実験で行った、目的地をあらかじめ設定し、その目的地をたどることを条件とした散策とほぼ同様の行動図式になっていると云える。

よって、こうした既定の計画を追従するだけの散策から自ら計画を構想する散策へと移行するための手がかりとして、案内標識が有効に機能するための方法を検討する必要がある。

(2) 自らの計画に基づく歩行

自然豊で、のどかな地域において、のんびりすごそうという意図できた観光客にとって、自由に散策できることが、より満足度を高めているようである。

しかし、時間を多くかけてすごすと言うよりは、1時間以内という短い時間内で、観光拠点から離れず手近な範囲で終わらせることが多く、ゆっくりと時間をかける事で、様々な体験ができるような散策は行われていない。

既定の計画を設けることなく、自由に散策する状態に近いと云えるが、観光の拠点近辺から離れ、さらに体験の幅を広げることはなされていない。より体験の幅を広げるためには、歩行を進めるその場で現場情報を得て、主体による計画の構想が必要である。現状では、この様な計画の構想はなされていない。

一つの計画によって歩行を進めた結果、さらに次の計画を構想して歩行を続けるような計画が連鎖していくための手がかりとして、有効に案内標識が機能するためのあり方を検討する必要がある。

4.3.2 散策型観光における案内標識に対する要求

今回の調査では、利用者は実験的に設置した案内標識のみでなく、様々な情報媒体も利用しているため、そこで見いだされる要求は、案内標識に限定されるものになっていない。

回答で得られた内容をまとめると、様々な情報が散策型観光には求められ、その情報を伝えるための媒体や、システムの混在が、利用者を混乱させているという問題を見いだすことができる。

また、ガイドブックや、チラシ、パンフレット、ポスターなど、印刷媒体で提供される情報に対する依存度が大きい。こうした印刷媒体は、簡易に発行でき、発行者の立場や、発行する時期で内容が変化するものである。よって、情報が煩雑になることは避けられない。一方で、現場情報を伝える案内標識に対しては、トイレや方向指示に関する要求が大きいが、情報の最低限の機能である。案内標識は一度

設置したら容易に変更できるものではないが、逆に、トイレや方向といった情報以外にも、印刷媒体で表示する内容の整合性をとり、情報を示す可能性もあると考えられる。

しかし、今回、実験的に設置した案内標識に対する評価は、利用者にとっては、新しい試みとしてよいと評価されている側面もあり、情報の内容とそれによってもたらされる歩行の拡大という実際的な効果に関しては把握できていない。

5. 本章のまとめと今後の課題

5.1. 本章のまとめ

これまでの考察から、地域観光地における散策の実態と案内標識の利用のされ方について、次のように把握することができた。

① 地域観光における散策の可能性

地域観光に対して、多くの観光客が散策に対する期待感を持っており、実際行った場合の満足度も高いことが明らかになった。つまり、地域観光における散策の可能性は高い。

しかし、範囲が限定されている公園を散策することとは異なり、現状では、観光地において散策が自由に行うことは、ほとんど実現できていないことが分かった。

② 地域観光における散策の特性と問題

散策のあり方として、既定の計画に依存して散策を行った場合は、ある程度の充実した散策の広がりを見せているが、既定の計画がなく、主体的に計画を構想する必要がある場合では、ほとんど散策を広げることではない。

このように、地域観光における散策歩行の、2つの散策の特性を見いだすことができたが、どちらの場合でも、歩行者が現場の空間情報を手がかりとして、散策を進めるものではないという共通の問題点があることが明らかになった。

③ 散策観光における散策歩行拡大のための情報提示の必要性

観光客が、散策を行う際に求める情報の内容は多様であるが、案内標識に対する期待は、現状では高くない。しかし、印刷媒体による情報提供に対しては、多く依存している現状が明らかになった。このような印刷媒体のみでは、現場情報との正確な対応は、利用者の能力にゆだねられてしまっているため、現場の正しい情報が利用者にうまく伝わらず、混乱が生じている状況も見いだせた。

これらのことから、散策を拡大するためには、現場の空間情報を的確に伝える案内標識の必要性は高いと考えられる。

5.2. 今後の課題

本章では、散策が展開されやすい状況を作るため、遊歩道において実験的に案内標識を設置し、交通社会実験期間にアンケート調査を行うことで、散策に関するおおよその傾向性を把握することができた。

しかし、今回の期間中では、設置した案内標識や遊歩道では、想定していた散策は多く行われておらず、具体的な調査はできていない。そのため、案内標識が利用者の散策行動に、どのように働くのかは不明である。よって、今後は、より具体的な利用者の行動に関して調査を進めることが課題である。

参考文献・注

- *1) 清水忠男, 原寛道, 吉谷地裕, 他: 広域連携による自立型経済圏形成推進事業(千葉県鴨川市他) 報告書, 南房総観光連盟 2004.3
- *2) この事業は、富浦町から千葉大学工学部デザイン工学科環境デザイン研究室にデザイン計画に関する調査が委託され、千葉大学工学部の学生(石井, 柴田, 中島, 長原, 町川)を原と清水が指導をしてデザインに関する調査提案を行った。
- *3) 原寛道, 吉谷地裕, 大垣友紀恵, 松尾拓弥, 近田華子, 金潤秀, 清水忠男: 散策観光者のためのサインシステムデザインの提案, 日本デザイン学会デザイン学研究作品集, NO.10, pp.20 ~ 23, 2005.3.30
- *4) 大垣有紀恵: 千倉町ピクトグラムの提案, 千葉大学卒業制作, 2002